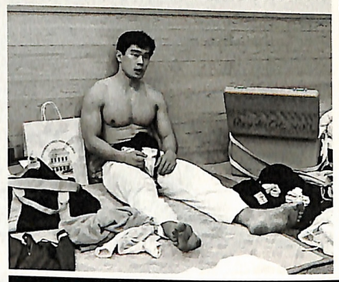
百人組手により腎臓障害を抱えながら第5回世界大会にて準優勝に輝く奇跡

引退を賭けて戦った第22回全日本で、悲願の初優勝、無冠の帝王の名を返上した。翌年の第5回全世界でも緑と決勝を争い、準優勝を成し遂げる。長きに渡ってトップに君臨。

THE LEGEND OF STRONGEST
極真・最強伝説を創った戦士たち

増田 章



◀誰もが増田の初優勝を信じて疑わなかった第20回全日本、4回戦でまさかの敗退に控室で呆然。

▲第5回全世界準決勝で、外人勢ただ一人生き残ったリビエールを必殺の下突き連打でストップ。日本の王座死守の功労者となる。

▶初の全日本制覇を成し遂げた翌年には、史上6人目の百人組手完遂者となる。

ないと気がすまなかった。テストも99点では満足できず、常に百点をめざした。完璧を追究する性は、のちに空手に活かされる。

小学校高学年の増田にはある種のスーパーマン願望があり、鉄棒や鉄アレイ、エキスパンダーなどの器具や、腕立て伏せ、スクワット、自転車などで自分の肉体をいじめ抜いた。極真に入門するのは高校入学後だが、そこで最初から「なんであいつはあんなに馬力があって強いのだろう。組手でも恐いもの知らずで向かってきた」と浜井識安支部長や先輩の水口敏夫に舌を巻かせた下地は、小学校時代からの〝自主トレ〟の積み重ねにあった。

第2回北信越大会に準優勝し、全日本への扉を開けた。当時、増田は「北極へ行っても南極へ行っても、エベレストの頂上でも、アマゾンの奥地でも、オレは増田章だ！　と胸を張って言える、そんな生き方がしたい」という大志を抱いていたと伝えられる。増田は大会の成績だけでなく、いつも自分の人生観と葛藤していた。

その葛藤の一つの中間経過が第16回全日本の不出場だったろう。この時点で彼には第14回全日本8位、同15回5位、第3回世界大会出場の実績があった。しかし第16回全日本のとき、増田は極真の道衣姿でなく、一カメラマンとしてリングサイドから試合を活写していた。

その頃増田は神奈川県にある写真の専門学校に籍を置いていた。ロバート・キャパ（ピューリッツァー賞を受賞した報道写真家。ベトナム戦争で〝爆死〟のような生き方に感銘を覚えたのがきっかけだったという。増田にとって空手も写真も、自分を表現するための一つの《芸術》だったのだ。しかし最終的に彼は、写真では自らのアイデンティティーを構築できなかった。第17回全日本で極真に回帰する。前年、ファインダー越しに見た黒澤浩樹の優勝が刺激になったことも否めない。すでに城西支部に移籍していた増田にとって、黒澤は同門だった。

復帰した第17回全日本、同18回大会で増田は松井章圭に敗れた。松井とは第14回大会でも対戦しており、記録上は通算3連敗。だがその実態は、松井が「私が勝ったと実感できた試合は、3試合のうち一つもなかった。彼は国内で最も私を苦しめた。最強の男だった」と語っていることから明らかだ。増田と松井は、彼らが20歳の頃から友情とライバル関係を育んできた。増田にとって松井は「自分を磨いてくれる砥石のような存在」だったのである。

チャンピオンの座はいつも薄紙一枚先にあった。第17回全日本3位、同18回2位、第4回世界大会3位。薄紙一枚を増田は破れず、悶々とした。松井が引退した第20回全日本は、ある意味で絶好のチャンスだった。だが増田は4回戦で失速し、優勝は伏兵の桑島保浩がさらう。

第20回全日本は〝魔物が棲む〟といわれた大会で、この年、判定基準が大きく揺らいだとされる。増田も魔物の罠に落ちた。〝無冠の帝王〟という悲劇的な称号を授けられたのも、この頃からだ。

第21回全日本はビッグハリケーン八巻建志に敗れ、4位。後輩に次々追い抜かれながら、増田は夢を信じた。いつも彼の瞳は未来を向いていた。その頃、出合った一冊の書物が増田の空手観に革命をもたらした。『メンタル・タフネス』という本だ。その中に大要、次のことが書かれていた。――勝負に勝つにはメンタル・タフネスが必要である。しかしプレッシャーを作ってはいけない。試合を楽しみ、なおかつ集中力を持って挑戦することが大切である。

目から鱗が落ちる思いがしたという。以来彼は《燃える》ことと《夢を信じる》ことのみを戒律とした。

見果てぬ夢、を現実のものにしたのは1990年。全日本デビューから足掛け十年の歳月が流れていた。大山総裁が好んで使った言葉（忘語）に「石上十年」ある。増田のイメージに何となく似合わないが、結果を見れば彼はそれを地で行った。デビューから頂点にたどり着くまで十年を要した選手は、増田の他にいない。

マラソンの金メダルに縁がなかった。しかしある時期、世界で最も速いランナーだったことは確かだ。おそらく増田にも、そして数見肇にも同じことがいえよう。世界チャンピオンには縁がなかった（数見は今のところ）。だがそれをも凌ぐ存在感を有し、世界中のすべての空手家を震撼させた時期があった、と。

増田が百人組手で負った腎臓障害のダメージ。それを乗り越えて準優勝に輝くこと自体、一個の奇跡だった。敗れざる男、増田章だからこそできた、究極の離れ業だったといえる。

分裂後の第6回全世界にも3年間のブランクを経て出場。通算4度目の世界大会出場となったが、準々決勝で塚本に敗れた。

▲第5回全世界では決勝で緑に敗れ世界王座の夢は散る。

〝孤高の帝王〟増田章

「夢を信じて」走り続けた苦節10年 第22回全日本大会で遂に頂点に立つ

大山倍達はカーテン越しに窓の外ばかり見ていたという。目に光るものが湧き出ていた。一言でも言葉を交わせば、それは声にならず、とりとめもなく涙が流れ出てしまうことを激情家の総裁は知っていた。ベッドに横たわった男も、こみ上げそうになる嗚咽を堪えていた。彼も泣いていた――。

1991年5月、百人組手を完遂し、直後に入院した増田章を大山総裁が日本医科大学多摩永山病院にお見舞いに訪れたときの光景を、総裁に同行したビデオ会社の社長はそう証言した。

僕が増田の病室を訪ねたのは、その数時間後だった。彼はすでに口がきける状態にあった。取材はしなかった。10分か20分で病室を辞した。そのとき、増田に頼まれたものがあった。彼が入院生活の中で暇つぶしに読むための本だった。僕の記憶に間違いがなければ、あとで届けた本は柴田翔の『されど、われらが日々』(芥川賞)だったか、沢木耕太郎の『敗れざる者たち』だったはずだ。『敗れざる者たち』は、『深夜特急』などで名高い沢木耕太郎の処女作で、スポーツジャーナリズムという世界に新しい時代の旗を掲てた珠玉のノンフィクションとして知られる。スポーツ選手の光と影を精巧な筆致で綴ったあの作品を読んで、増田は何を思ったのか。増田章もまた、永遠に敗れざる者、である。

極真の原稿を書いて20年になる。

その中で、何人かの選手に対して〝現役時代の誰それは――〟というふうに、わざわざ「現役時代」という断りを入れるのにためらいがある。その筆頭が三瓶啓二と増田章である。永遠に前を見続けている(もしかしたら他の選手もそうなのかもしれないが)イメージが強いからだ。

増田章は「夢を信じる」というフレーズを好んだ。夢は第22回全日本で大輪の花を咲かせた。当時、苦節何年、だとか、隠忍何年、だとか、雌伏何年、といった形容がされ、多分僕もその形容に荷担した一人だ。

増田が、勝てなかった時代が長かったのは事実だ。松井章圭が今なお、国内最大のライバルだったと言ってはばからない増田は、常に優勝戦線に絡みつつ、90年まで頂点に立つことはできなかった。七戸康博同様、〝無冠の帝王〟と呼ばれた。

悲劇的なこの呼称が、今回もまた継続するのか、と思われたのが第22回全日本の決勝・緑健児戦である。緑にも死角がなかった。延長までは互角。最後の延長で決着がつかなければ、体重差で自動的に緑の優勝が決まる。内容は互角であっても、事実上増田は絶体絶命の立場にあった。

再延長の1分過ぎ、くすんでいた増田の個人史をきらびやかなものに変える右上段廻し蹴りがうなった。

▲デビュー戦となった第13回全日本大会2回戦で、全盛期にあった三瓶を〝あわや〟というところまで追いつめる離れ業を演じた。

▲第15回全日本大会では同門の先輩・水口敏夫や、ライバルの松井章圭よりも上位の5位に入賞。第3回全世界大会への出場権を獲得した。

技有り！　この瞬間、無冠の帝王は無冠を返上したといってよい。

第5回世界大会で増田は日本のエース格と期待された。だからこそ百人組手挑戦の試練も与えられた。増田はこれを、真実死線をくぐり抜けるように、ボロボロになって完遂した。掟破りの噛みつきまで犯した。闘う人間の本能だった。だが世紀の荒行の代償は大きかった。腎臓障害という爆弾を抱えてしまったのである。

ダメージ、という点から見れば、過去の百人組手で増田が負ったダメージが一番深刻だったであろう。あの百人組手がなければ、増田が世界大会を制していた可能性は高い、という関係者はかなりの数にのぼる。それでも増田は「夢を信じて」走り続けた。

準優勝に終わった第5回世界大会、第24回全日本では3回戦で敗れた後、増田はいったん第一線を引いた。それが不死鳥のように甦ったのが96年1月の横浜アリーナである。結果的にはこの大会が、増田の最終公式戦になった。

塚本徳臣との準々決勝で増田は、彼が最もまぶしく輝いていた時代の片鱗を見せた。7分間の試合の中の、ほんの短い時間のことではあったが、それはさながら暴れ馬の如き動きだった。延長で増田は塚本の右の前蹴りをクリーンヒットされた。それを挽回するため、直後に増田が激しく塚本に詰め寄ったのだ。体を揺らし、速射砲のような左右の正拳を塚本のボディに打ち込む。勢いあまった突進は塚本に躱され、場内に転落…。この大会で最も大きな拍手が沸いたシーンだ。

さらに、再延長における中段廻し蹴りを軸にした突進も見応えがあった。ロウソクの炎は燃え尽きる寸前に、ボッと、最後のあがきを見せる。その煌めきに似ていた。彼はファンの心に増田章という男の本性をダメを押すように焼きつけ、試合場を去っていった。本誌は万感の思いをこめて「マ・ス・ダ・チ・ル」という見出しをつけた。

増田もまた、息の長い選手だった。全日本デビューは、ライバル・松井章圭に遅れること1年――第13回大会。そこでファンに最初の印象を刻む。2回戦で時の王者・三瓶啓二に善戦したのだ。増田にとって、これは大きな自信になった。

1962年の4月から63年の3月にかけて、極真史を彩る傑物が次々に誕生した。松井章圭、緑健児、黒澤浩樹、そして増田章。彼らはみな、日本の学制では同一学年だ。増田は石川県金沢に生まれた。本人いわく、子どもの頃は「負けず嫌いで、我が強く、腕白で、アンフェアなことが大嫌いなガキ」だったという。世の中は自分を中心に回っており、勉強でもスポーツでも何でも一番になら

第4回全世界大会では準決勝に進出。アンディ・フグと対戦するも延長戦の末に敗れた。しかし、本戦は増田が勝っていたのでは…と証言する人も多い。

ますだ・あきら●1962年5月22日、石川県金沢市出身。
第13回全日本大会で、全盛時の三瓶啓二と互角に渡り合い注目を集める。
その後、第14回大会8位、第15回大会5位、第17回大会3位、
第18回大会準優勝、第21回大会4位と優勝まであと一歩のところで敗れ〝無冠の帝王〟と呼ばれた。
しかし第22回大会において悲願の初優勝を飾り、
第5回世界大会ではエースとして準優勝を果たす。

三瓶代表が松井館長に呼びかけ！

K-1グランプリ99決勝戦&極真・第7回全世界大会速報号▶

ゴング格闘技 特別編集

空手に愛をこめて。

Karate & Karate

ワールドボクシング1月号増刊

K-1世紀末大波乱！ホースト復活V

岡本、世界王者に君臨

極真（三瓶代表）世界統一戦構想ブチ上げる！

その時、フィリオは…

アーツが沈んだ！

アンディ散る！

グレコ倒れる！

定価680円

(株)日本スポーツ出版社

K-1GP決勝戦&極真世界大会

2000年（平成12年）1月17日発行
発行人●竹内宏介　編集人●木原大輔
発行所●株式会社日本スポーツ出版社　〒112-0003 東京都文京区春日2-2-6
☎03(3815)1707（編集部直通）　☎03(3815)1705（広告部直通）
●振替口座●00150-5-84885

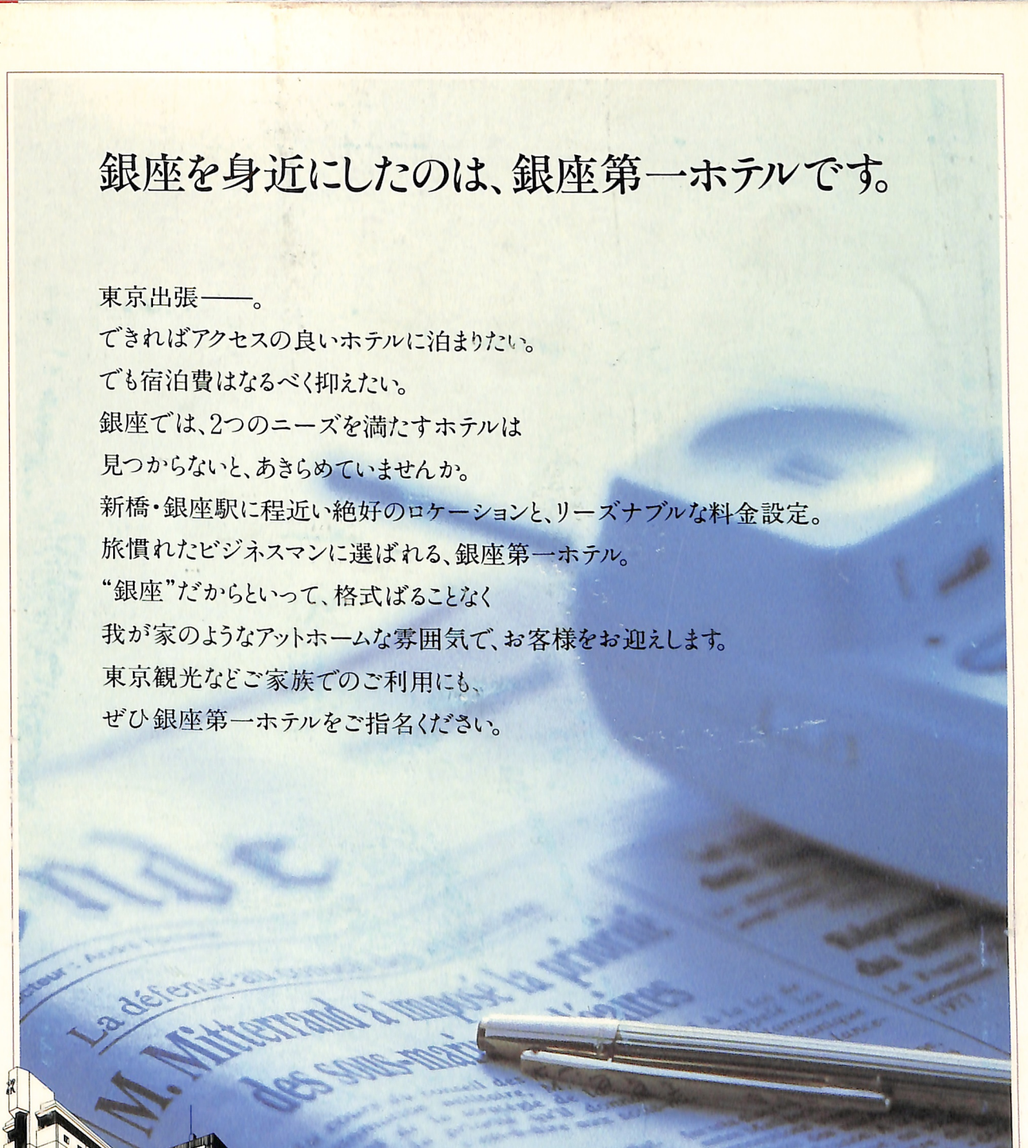
定価680円（本体648円）

雑誌 09804-1
00-2/5　T1109804010686

Printed in Japan　印刷／凸版印刷株式会社

銀座を身近にしたのは、銀座第一ホテルです。

東京出張——。
できればアクセスの良いホテルに泊まりたい。
でも宿泊費はなるべく抑えたい。
銀座では、2つのニーズを満たすホテルは
見つからないと、あきらめていませんか。
新橋・銀座駅に程近い絶好のロケーションと、リーズナブルな料金設定。
旅慣れたビジネスマンに選ばれる、銀座第一ホテル。
“銀座”だからといって、格式ばることなく
我が家のようなアットホームな雰囲気で、お客様をお迎えします。
東京観光などご家族でのご利用にも、
ぜひ銀座第一ホテルをご指名ください。



■お得な宿泊プランも多数ご用意しております。
■お問合せ・ご予約／東京リザベーションセンター TEL.03-3501-5161

銀座第一ホテル
〒104-0061 東京都中央区銀座8-13-1 TEL.03-3542-5311(代)